

## 柳川先生の笑い

藤井健志

(昭和56年修士修了)

先日、柳川先生の笑い顔を見て、ふと思ったことがある。少し先生が変わられたのではないかと。

私が先生に対して一つのイメージを持ち始めたのは、1976年、私が宗教学科に進学した年の夏休み前だった。講義の終わった後の夕方、新宗教の調査について先生の指示を仰ぎに行ったことがあった。その時、先生は私を飲屋に連れて行き——つまみは確かヒヤッコだったと思うが——飲みながら答えて下さった。そしてその後、「私はこのママと話があるから君は帰りなさい」と言われた。その時の驚きは今だに覚えている。私事になるが、私の父もやはり東大で教えていたが(工学部)、酒もタバコもやらない人間だった。「厳格」というものに目鼻と手足をつけたような人間で、

「最後のアカデミックな東大教授」と皮肉を言われてもそれを皮肉と気づかないような人間であった。私の東大教授というイメージはそういうものだったので、驚きが一層大きかったのだろうと思う。その後、1977年、79年のハワイ調査に連れて行っていただいたりして、先生とは1カ月以上も同じ屋根の下を寝泊まりしたが、アルコールをたしなみ、愉快そうに話をする様子をよく拝見した。(どこでも、女性に人気があったようである。)私が柳川先生と父とを対比して話したら、ある先輩が「人間の両極端だ」と言った。それは冗談であるが、先生はそう言われることを楽しんでいるような風さえ時には感じられた。学問をはじめとして幅広い事に興味を持っていろいろなことを面白

がり、しょっちゅう笑っておられた。ただ先生の笑いは抑制の効いた笑いだったような気がする。おかしくておかしくて笑いが止まらなくなったということはなかったように思う。先生には、どんなに面白がってもそれに流されず、最後にニヤリとして辛辣な皮肉を一言付け加えるようなところがある。先生は開放的で表現が豊かであるが、感情に流されるようなことはなかった。先生が不機嫌な顔をしているのを見たことがない。学生がバカなことを言ってもニコニコとうなずいているだけである。開放的でありながらホンネが見えにくい方だと思っていた。もっとも私があまり勉強をしない学生だったので到底私に対してはホンネを明かせられなかったのかもしれない。

このように私は、先生に対して、親切と辛辣と偽悪が入りまじった鎧を身につけているような印象を持っていた。先生の笑いはこの鎧で抑制され、その時先生の望んだ形で先生の表情に現れてくるようにさえ思えた。そして、最近私が感じているのは他でもないこの鎧に裂け目ができてきたのではないかということである。最近というのは昨年の御病気から回復後のことである。ただし、私がふ

と思ったことで、勝手な思いすぎかもしれない。私は2度ほど先生の笑い方を見てオヤッとやったことがある。ほんの短い時間だったが、先生はおかしさが抑えられないという様子で顔をクシャクシャにして笑われたことがある。何が原因だったかは覚えていないが、先生のその時の笑顔は今でもはっきり覚えていて、先生のナマの感情を垣間見たような思いがした。私のこの時の印象は悪いものではなかった。先生がより自然に感情を表わすようになられたという気がしたのである。これは悪いことではない——と私は思う。また父のことになるが、父は70歳近くなつた今、以前は考えられなかった程、無邪気な好々爺になってきた。この無邪気さはストレスを置き去った老人の活力の源でもある。やがて子供のようになるのであろうか。これは悪い老い方ではない——と私は思う。私は先生の病気後の笑いを見てこんなことを考えた。これがあたっているのかいないのかはわからない。しかしどちらにしても、柳川先生は私に対しては今までどおり、またニヤリとした笑い顔を向けるのではないかと思う。